

わ

が

街

わ

が

故

郷

日本精工株式会社 藤沢工場

1. 藤沢工場紹介

藤沢工場は、1937年(昭和12年)に鋼球工場として大崎工場(1914年)、多摩川工場(1935年)に次いで建設されました。

現在は、大崎工場(1966年閉鎖、藤沢工場へ統合)は1987年本社ビルに建て替わり、多摩川工場は海外移転のため1999年に閉鎖されており、国内9工場の中で最も古い工場であり最大の工場(敷地面積164千㎡)です。鋼球専門工場としてスタートした藤沢工場はいろいろな変遷を経て、玉軸受、円筒ころ軸受、円すいころ軸受、自動調心ころ軸受、精密軸受など小形から超大形まで、NSKの工場の中では一番多品種のベアリングを製造しています。

工場の敷地内には技術開発本部、軸受技術センター、総合研究開発センター、生産技術センター、自動車技術センターの技術部門が同居しています。2001年7月に生産技術棟が、2002年2月には技術開発センター棟が完成し、今まで藤沢工場内に別々にあった技術部門がこれらの建物に集結することができました。

新しい技術開発センター棟や藤沢工場の本館からは、南東に藤沢市のシンボリック的存在である江ノ島の灯台、西に富士山、北西に丹沢山系がよく眺められ、環境面でも最高です。

藤沢工場はNSK軸受の要の工場であり、技

術の司令塔といえるでしょう。



新技術開発センター棟



新技術開発センター棟から見た江ノ島



新技術開発センター棟から見た富士山

2. 藤沢市と観光スポット紹介

藤沢市は人口377千人、面積69.5km²の広さをもち、南は相模湾の海、東は古都鎌倉市に接し、湘南地方のほぼ中央に位置します。

藤沢は、江戸から6番目の宿場として江戸時代から栄えた町でした。鎌倉時代の有名なお寺としては、1271年(文永8年)に日蓮上人が処刑を免れたという「日蓮上人刑場旧跡」のある竜口寺や、1325年(正中2年)に一遍上人四世(呑海)によって開山された遊行寺があります。毎年1月2日、3日の両日に行われる恒例の箱根駅伝は、このお寺の前の遊行寺坂を選手が走り抜けて行きます。

お寺のことはご存知なくても、片瀬江ノ島海岸は湘南の海水浴場やビーチバレーで有名です。夏の海岸沿いの国道134号線は、海水浴客の車で大渋滞となります。

134号線から弁天橋を渡り江ノ島に入ると、お土産屋さん、旅館、休憩所が両側に立ち並ぶ坂道の参道があります。この参道を通り抜けると屋外エスカレーターがあります。これに乗れば、頂上まで階段を上がらずに行けます。もちろん有料です。途中には江ノ島神社の一つの^{へつのみや}辺津宮があります。ここには鎌倉時代の、八本の手に剣、弓矢、法輪、宝珠などをもつ^{はっぴべんざいてん}八臂弁財天と琵琶をもつ^{みょうおんべんざいてん}妙音弁財天(通称裸弁天)が奉られています。

江ノ島の頂上には1874年(明治7年)にできた植物園があり、ここに展望塔を兼ねた江ノ島灯台があります。この展望塔は地上53.7mで、雄大な相模湾と伊豆から房総半島まで一望に見渡せますが、すでに建造されて50年を超え、まもなく建て替えされる予定になっています。建て替えに伴い行われている発掘調査では、明治時代に造られた温室の遺構が確認され、「当時の様子がわかる貴重な発見」として保存方法など

が検討されているようです。

展望塔をあとにして、下りの階段を延々と降り進んでゆくと、江ノ島の弁天橋と反対側にある岩浜の^と稚児ヶ淵^がに出ます。ここには波により自然にできた奥行150mもある洞窟があり、奥には波の力で自然にできた「日蓮寝姿台」が祭られています。

藤沢で忘れてはならない乗り物は、藤沢～鎌倉間10kmを走る江ノ電です。江ノ電は1902年(明治35年)9月に、藤沢～片瀬(現江ノ島)間3.4キロが日本で6番目の電気鉄道として開通しました。今年2002年は開通100周年にあたります。開通当時は藤沢周辺には電気が通っておらず、今の石上駅(藤沢駅の次の駅)付近に発電所を造り、ここから電気を賄ったそうです。湘南地区では初の発電所で、余った電気を周辺に分け、地元で文明の灯がともったとか(新聞記事からの情報ですが、本当でしょうか)。このような昔懐かしい江ノ電は、開通当初から現在でも単線のまま町中や美しい海岸沿いをゆっくりとした走りながらも、買物、通勤、通学、観光の足として活躍しています。

3. 江ノ島取材記

「わが街わが故郷」の中で江ノ島を紹介するにあたり、江ノ島を久しぶりに訪ねてみました。鎌倉から江ノ島までは250円払い、江ノ電に乗りましたが、土曜日で電車は満席でした。

江ノ島駅から10分ほど歩いて、江ノ島の弁天橋に到着。ここから300円で船に乗り、岩屋に直行することにしました。この岩屋は岩崩れがあったため、1971年(昭和46年)以来閉鎖され、総工費14億円をかけ稚児ヶ淵から洞窟までの橋の造成、洞窟の延長、安全対策、観光用のお化粧などを施し、1993年(平成5年)に再開されています。500円を払い、洞窟の中に入りますと、

途中から第一岩屋と第二岩屋の分岐点があり、第一岩屋へ。途中で手燭(てしやく)を貸してくれるところがあり、そこから先は天井も低くなり、ろうそくの灯りで足元を見ながら進むほど暗くなります。この洞窟の一番奥(152メートル)に日蓮寝姿台がありましたので撮影してきました。説明がなければいったい何なのかかわからないと思います。第一岩屋を引き返し、第二岩屋に行くところ



日蓮寝姿台

何やら暗闇に閃光とともに唸り声がかかります。そばにいた小さな子供が怖がっていました。これが次の写真にある龍なのです。ここが龍信仰の場所とのことですが、何か子供だましの感じがしないでもありません。洞窟をあとに橋を渡っ

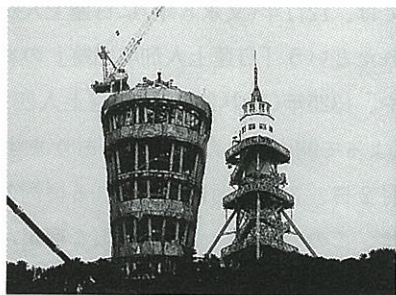


岩屋の龍

て稚児ヶ淵を通り、道沿いにある茶店を見ながら階段を登って植物園のある江ノ島の頂上へと向かいました。岩屋への往復に階段を登り降りすると、かなりの運動になるかもしれません。歩くのに自信のない方は、片道だけ船を利用す

るのが正解のようです。

下の写真は途中で見た現在の江ノ島灯台(右)と建設中の新展望灯台(左)です。藤沢工場からは、これほど建設が進んでいるかよくわかりませんでした。灯台の立っている植物園は、当然ながら工事中で閉鎖されていました。



建設中の展望灯台

そのあと江ノ島弁財天の秘法、裸弁天と八臂弁財天を150円で拝観しましたが、ここは撮影禁止で残念ながらお見せできません。途中、1964年の東京オリンピックのときにできたヨットハーバーを眺めながら一気に弁天橋まで下り、江ノ島の散策は終了。取材費は、帰りの江ノ電の乗車券250円と途中で飲んだミネラルウォーター150円を含めて1600円でした。

(日本精工株式会社 平田 幸雄)